

巻頭言

2007.5月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

「合格体験記」まで

茗溪塾塾長 宇野 雅春

桜の季節はあったのか、無かったのかわからないくらい多忙のうちに過ぎ去り、ゴールデンウィークのまただ中で、「教務便り」を書いています。今年は例年より一ヶ月早く「合格体験記」も完成し、卒塾生全員に送付も済ませました。段取りの良さという点では、過去にない進み具合です。やり遂げた余韻に浸りたい気持ちもありつつ、次の学年は全く違う次元で、それぞれの難題にぶつかっています。早く、前年度にけりをつけて（気持ちの上で）次に専念したいというのが私の心境です。

「合格体験記」は選ばれた人たちが書いているものではありません。ほとんどの生徒が書いてくれるためにそこから選考しています。掲載されるものはごく少数にすぎません。体験記の中に書かれている喜びの声や感謝の心は、載せられていないたくさんの合格体験記にも溢れています。その余韻に浸って全てが終わっていくのなら、ことはとても簡単なのですが、去年のことは過去のこと。「今」が既に始まっています。

そういえば、今年体験記を書いた生徒も、去年の今頃はそれぞれ順調とはいえない「何か」を引きずっていたに違いないのです。合格体験記の中にもそれは読みとることができます。

中学受験では、5年生の時の学習へのとまどいが最も多く「正直、辛かった」とか「やめたい」という言葉が目につきます。そこから、勉強に「楽しさ」が見えて来ている生徒は、成績を大きく伸ばしています。きっかけとして最も多いのが、夏期講習や森のスクールなどです。高校受験では、部活に追われる中3夏まで、なかなか満足のできる勉強体制になっていないことが読みとれます。そして最終盤の猛烈ながんばり。今の公立中学生が置かれている状況がよくわかります。大学受験でも、順調というよりは、ほとんど受験直前まで悩みや不安そして焦りがつきまっています。「受験」が抱えるハードルの高さというものが、そこには見えます。

この時期の、私の不安定な気持ちの理由は、多分「親の期待」と「それに対応できない子ども」の状況にあるように思います。受験が終わってしまえば嘘のように消えてしまう感情なのですが、親も子どもの状況を理解できる段階にないことが、さらに問題を複雑にします。

つまり受験を終えて、自分を振り返り、冷静な気持ちで「合格体験記」を書くまでには、越えなければならないたくさんの課題があるということなのです。

今年、私なりにあらためて思ったことは、あくまでも受験の主役は本人自身だということです。一番辛いのも、一番うれしいのも、一番悩むのも本人だということです。なぜなら受験には、本人が越えない限り解決できない問題が沢山あるのです。

こんな作文を書いた生徒がいました。『受験が終わったら、誰が一番先にありがとうをいいたいですか?』なんだか不意をつかれたようで、ドキッとしました。自分の持っている記憶全てが頭の中を駆けめぐっていきます。たったの4、5秒が10分、20分と過ぎていくような気さえました。ありがとう? どうしよう。こんなこと初めて聞かれた。親? 友達? 先生? みんなにいいたいよ! でも... 早くしなくちゃ。「とりあえず何か言わないとだめだよ!」って面接の練習の時に言われたし!! あせってあせって、一度にいろいろなことを思い出しました。たくさんの思いが重なりあって思わず涙がこぼれそうになりました。泣かない。そう自分に言い聞かせていました。とりあえず「親」と答えなければ、このことはずっと頭に残っていました。何日も何日も考えました。』

結局、みんなにありがとう。と結ばれていくのですが、本当は、必死で努力を重ねてきたのは自分だったはず。誰もそこは、助けられないことです。「ありがとう」もうれしい言葉ですが子どもが困難を自分で越えてくれる、それが親にとっては一番うれしいことではないでしょうか。